

平成 27 年 11 月 18 日

## 高齢者のやけどに御注意ください！

消費者庁には、65 歳以上の高齢者が不注意や暖房器具等の誤使用によりやけどを負ったという事故情報が 338 件<sup>1</sup>寄せられており、死亡に至った事例もあります（平成 21 年 9 月 1 日から平成 27 年 9 月末日までの登録分）。

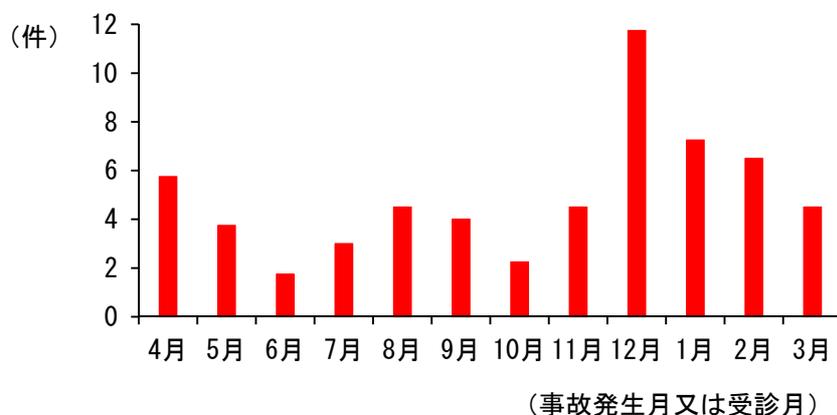
高齢者は若年者に比べて皮膚が薄く、また、運動機能や感覚機能が低下するため重いやけどを負うリスクが高まります。事故が多発する冬に向けて、特に高齢者に多い以下の事故を防ぐための注意点をお知らせします。

- (1) 低温やけど
- (2) 着衣着火
- (3) ストープの上に置いたやかん等の熱湯を浴びる事故
- (4) 入浴に際しての事故

消費者庁には、65 歳以上の高齢者が不注意や暖房器具等の誤使用によりやけどを負ったという事故情報が 338 件寄せられています。そのうち 56 件（16.6%）は入院治療を要した事例であり、死亡に至った事例も 2 件ありました。

熱傷事故は 12 月～2 月に多く発生しており、これからの時期は特に注意が必要です。

図 1 月別平均発生件数（平成 23 年度～平成 26 年度、n=238）



<sup>1</sup> 消費者庁発足以降、医療機関ネットワーク（238 件）及び事故情報データベース（100 件）に寄せられた事故情報。「医療機関ネットワーク事業」とは、参画する医療機関（平成 27 年 10 月時点で 30 機関）から事故情報を収集し、再発防止に活かすことを目的とした消費者庁と独立行政法人国民生活センターとの共同事業（平成 22 年 12 月運用開始）。「事故情報データベース」とは、消費者庁が独立行政法人国民生活センターと連携し、関係機関より「事故情報」及び「危険情報」を広く収集し、事故防止に役立てるためのデータ収集・提供システム（平成 22 年 4 月運用開始）であり、事実関係や因果関係が確認されていない事例を含む。件数は本件注意喚起のために特別に精査したもの。

高齢者に特に多い熱傷事故として、以下の4つが挙げられます。

## 1. 低温やけど

高齢者が低温やけどを負ったという事故情報は119件寄せられており、うち10件(8.4%)は入院治療を要していました。原因製品は、カイロ(28件)が最も多く、次いで、湯たんぽ(19件)<sup>2</sup>、ストーブ類(18件)、電気毛布、あんか(12件)の順で多く見られました。

低温やけどは、暖かく感じる程度の温度でも、長時間皮膚が接することでそれほど熱いと感じないままやけどになってしまうものです。

低温やけどは普通のやけどに比べて痛みが少なく、水ぶくれなどもできにくく、乾燥していることが多いため、一見軽そうに見えますが、長時間熱の作用が及んだために、深いやけどになっていることも珍しくありません<sup>3</sup>。高齢者は若年者に比べて感覚が鈍く、熱源に接する時間が長くなり、重症化しやすいと考えられます。

図2 低温やけどの例



写真提供：独立行政法人製品評価技術基盤機構

### 【事例1】

こたつで就寝し朝起きると、足指より出血しており熱傷に気付いた。左第1～3、右第1足指に熱傷を認め入院。左第1、2足指切断、第3足指は皮膚移植を行った。

(医療機関ネットワーク、受診年月：平成26年12月、70歳代・男性、要入院)

### 【事例2】

腰にカイロを貼り、電気毛布を付けたまま就寝した。翌朝カイロを剥がすと痛痒さがあり皮膚科を受診。表皮剥離が見られ、Ⅱ度<sup>4</sup>熱傷と診断された。

(医療機関ネットワーク、受付年月：平成26年4月、70歳代・女性、要通院)

<sup>2</sup> 参考：「ゆたんぽでの低温やけどを防ぎましょう」(平成25年2月27日)  
[http://www.caa.go.jp/safety/pdf/130227kouhyou\\_1.pdf](http://www.caa.go.jp/safety/pdf/130227kouhyou_1.pdf)

<sup>3</sup> 出典：「家庭の医学(第六版)」株式会社保健同人社

<sup>4</sup> やけどの深度については、熱による損傷が皮膚のどの深さまで及んでいるかで分類される。「Ⅰ度熱傷」とは表皮のみの熱傷、「Ⅱ度熱傷」とは表皮よりも深い真皮までの熱傷、「Ⅲ度熱傷」とは皮膚全層、さらに皮下組織まで損傷が及ぶ熱傷のこと。

### <事故を防ぐための注意点と対処法>

- 低温やけどを防ぐためには、長時間同じ場所を温めないことが重要です。44℃では3～4時間、46℃では30分～1時間、50℃では2～3分で皮膚が損傷を受けると言われています<sup>5</sup>。
- 暖房器具や湯たんぽ、カイロ等を使用する場合は、製品の使用上の注意をよく読みましょう。特に就寝時には、布団が暖まったら湯たんぽやあんかは布団から出す、寝るときはカイロは使用しない、電気毛布等は高温で使用しないなどの注意が必要です。
- 低温やけどは水で冷やしても効果はありません。見た目より重症の場合がありますので、痛みや違和感がある場合は医療機関を受診しましょう。

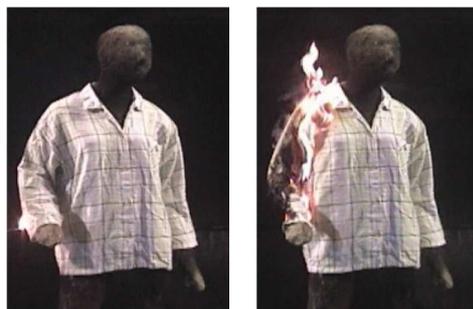
## 2. 着衣着火

着衣着火とは、何らかの火源により人の意思に反して身に着けている衣服に着火した火災のことです<sup>6</sup>。

高齢者が着衣着火によりやけどを負ったという情報は20件寄せられています。うち15件（75.0%）は入院治療を要しており、2件は死亡事例でした。着火源としては仏壇のろうそくの火（8件）、ガスコンロ（6件）の順で多く見られました。

図3 着衣着火のテスト

（炎を当ててから約1分後に燃え広がる場所）



資料提供：独立行政法人国民生活センター

### 【事例3】

自宅の台所で、やかんを火にかけようとガスコンロに火を付けた際に、着衣（ナイロン製）に着火。右上半身を包むように炎が上がった。同居の家族が水道水で全身に水を掛け消火し、救急要請。

（医療機関ネットワーク、受診年月：平成26年11月、70歳代・男性、要入院）

<sup>5</sup> 参考文献：「低温やけどについて」山田幸生「製品と安全」（第72号、平成11年3月）製品安全協会

<sup>6</sup> 出典：東京消防庁「平成26年版火災の実態」

#### 【事例4】

仏壇のろうそくに火を付けた際に服に燃え移って受傷。同居の家族が気づき、水を掛け消火しドクターヘリで搬送された。前胸部から顔面及び両上肢にⅡ度～Ⅲ度の熱傷。

(医療機関ネットワーク、受診年月：平成25年8月、80歳代・女性、死亡)

#### ＜事故を防ぐための注意点と対処法＞

- 火気の取扱いには十分に注意し、火を扱う時は近づき過ぎないでください。
- 毛足の長い生地や飾りの多い衣類、ゆったりした垂れ下がるようなデザインなど火の付きやすい衣類は、火を使う時は身に着けないようにしましょう。難燃性能や防災性能のある衣類の使用も検討すると良いでしょう。
- 仏壇でのろうそくの事故を防ぐためには、LEDを使った仏壇用のろうそくや線香の使用も検討すると良いでしょう。
- 着衣着火が起きた時は、水をかぶって火を消してください。水が無ければ床や地面に火を押し付けて消してください。決して走り回ってはいけません。

### 3. ストープの上に置いたやかん等の熱湯を浴びる事故

加湿等の目的でストーブの上に置いていたやかんや鍋を倒して熱湯を浴びたという事故は13件寄せられており、うち6件(46.2%)は入院治療を要した事例でした。

#### 【事例5】

火が付いているストーブを移動させていて、ストーブの上に置いていたやかんがひっくり返って湯が右大たい内側部に掛かった。右大たい内側部に熱傷Ⅱ度・熱傷範囲5%<sup>7</sup>。

(医療機関ネットワーク、受診年月：平成27年3月、60歳代・女性、要入院)

#### 【事例6】

つまずいて転倒した際、ストーブに身体が当たり、ストーブの上に置いていたやかんが倒れ熱湯が両下肢に掛かった。熱傷Ⅱ度・熱傷範囲15%。

(医療機関ネットワーク、受診年月：平成26年12月、80歳代・女性、要入院)

#### ＜事故を防ぐための注意点と対処法＞

- ストーブの上にやかんや鍋を置くのは避けましょう。
- 転倒を防ぐため、床に不要な物を置かないようにしましょう。
- 熱湯を浴びてしまったときは、すぐに水で十分に冷やしましょう。着衣の上から熱湯を浴びた場合は無理に脱ごうとせず、衣服を着たまま冷やしましょう。

<sup>7</sup> やけどの重症度は皮膚損傷を受けた深さと面積によって判定される。成人の場合、Ⅱ度15%以上、Ⅲ度2%以上が中等症と判定される。(参考：一般社団法人日本熱傷学会ウェブサイト)

#### 4. 入浴に際しての事故

入浴の際にやけどを負ったという事故情報は11件寄せられており、5件(45.5%)は入院治療を要していました。

高齢者は、感覚が鈍くなるため高温の湯につかってしまったり、突発時への反応も遅くなるため熱源に接する時間が長くなることが考えられます。特に浴槽でのやけどは広範囲に及ぶことが多く、重症化しやすいと考えられます。

##### 【事例7】

自宅のお風呂に80~90度の熱湯だけを溜め、水で温度を調節するのを忘れて右足を浴槽内に入れてしまった。右太たい部からでん部まで熱傷あり。熱傷Ⅱ度・熱傷範囲10%。

(医療機関ネットワーク、受診年月：平成27年8月、80歳代・女性、要入院)

##### 【事例8】

入浴中に追いだきし、熱湯を浴びた様子。脱力、両下たい熱傷により緊急搬送。両下たいにⅡ度の熱傷。

(医療機関ネットワーク、受診年月：平成26年1月、90歳代・男性、要入院)

#### <事故を防ぐための注意点と対処法>

- 高齢者がお風呂に入る前に、浴槽やシャワーの湯温が適温かを確認しましょう。
- 入浴中の追いだきはやけどの原因になることがありますので、過度な追いだきは控えるとともに、循環口に触れたり体を近づけたりしないようにしましょう。
- 熱湯に触れてしまったときは、すぐに水で十分に冷やしましょう。

#### <関係機関への要請>

高齢者の熱傷事故を防ぐためには、本人だけでなく家族や介護者、周囲の人間が日頃から注意を払うことが大切です。

このため、消費者庁では、暖房器具等の製造事業者団体及び高齢者・福祉関係の団体に対し、熱傷事故の予防策について消費者へ周知・啓発を図るよう要請しました。

#### <本件に関する問合せ先>

消費者庁消費者安全課 中川、石井  
TEL : 03 (3507) 9137 (直通)  
FAX : 03 (3507) 9290  
URL : <http://www.caa.go.jp/>

## <参考> 低温やけどについての注意表示例

### ゆたんぼ

一般社団法人製品安全協会が定めるゆたんぼのSG基準では、低温やけどのメカニズムの説明に加え、以下の低温やけどを防ぐ方法の説明を記した注意文書を添付することとしています。

- (a)「布団から出して使用する 布団が暖まったら、ゆたんぼを布団から取りだして就寝すると、低温やけどの危険性はありません。このような使い方をおすすめします。」
- (b)低温やけど対策品を使用すると低温やけど防止に効果がある旨（「低温やけど対策品」を販売していない者にあっては、当該注意事項の表示を要さない。）
- (c)「一定時間ごとにゆたんぼの位置を変える 保護者や介護者など周囲の方がいる場合は身体と同じ部位に触れ続けられないよう、時々、ゆたんぼの位置を変えてあげてください。」
- (d)「厚手のタオルや布で包む 必ずしも低温やけどの防止には効果はありませんが、付属や市販しているゆたんぼカバーを使用し、その上から厚手のバスタオルや布で包むと、表面温度が下がるため、低温やけどを生じるまでの時間は長くなります。」
- (e)「低温やけどは皮膚の深いところまで達することがあります。万が一、低温やけど（皮膚の変色や痛み）が起きたときには、すぐに専門医の診断を受けてください。」

### 貼るカイロ

日本カイロ工業会では、貼るタイプのカイロについて、低温やけど防止のための自主基準を設け、以下のような注意表示を記載することとしています。

- ①肌に直接触れないように使用すること。
- ②眠る時は使用しないこと。
- ③熱いと感じた時は使用を中止すること。
- ④1時間に1回程度肌の状態を確認すること。
- ⑤下着等薄い衣類の上から使用の場合は、特に注意すること。
- ⑥子供や身体の不自由な方、肌の弱い方が使用の場合は、低温やけど防止のため特に注意すること。  
また、自分ですぐに使用を中止できない状況で使用の場合も十分注意すること。
- ⑦糖尿病等温感及び血行に障害を持つ方は、やけどのおそれがあるので、医師又は薬剤師に相談すること。
- ⑧ベルトやサポーター、椅子等で押し付けて使用しないこと。また、押し付けるようにして横にならないこと。
- ⑨同時に複数袋の使用は、低温やけどしやすいので注意すること。
- ⑩こたつ、寝具の中や暖房器具の近くでは使用しないこと。